

韓国語学習者の動機づけに関する予備的研究

岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ

Abstract:

A Preliminary Study on Motivation among Learners of Korean in Japan

Over the past few years, South Korean pop culture has been increasingly gaining popularity among Japanese people. Accordingly, Japanese youth began to express an interest in learning Korean, either on their own or by enrolling in language classes, in order to better understand their favorite artists. This preliminary study attempts to examine how their motivation to learn the language changed over time along with identifying the characteristics of Korean learners in Japan, while comparing with English learners. The participants included 14 first-year Japanese female students in the Korean language course at a college in Saitama, including five who had studied in South Korea for six months. A questionnaire was administered to examine the changes in the degree of motivation for language learning to further analyze responses quantitatively. The results showed that the entire participants had a significantly lower score in *attitudes to learning abroad* in the post-test.

Keywords: Japanese learners, Korean as a foreign language learning, motivation, study abroad, quantitative analysis

要旨：

近年、日本において韓国の大衆文化に対する人気が目まぐるしく注目を浴びている。その影響を受けて、日本の若者の中には好きな韓国人アイドルに対する理解を深めるために、自ら進んで韓国語を学習したり、授業を受けたりして韓国語学習に興味を示す人が増えてきた。この予備研究は、英語学習者と比較をしながら、韓国語学習者の動機づけや態度の変容およびその特徴を探ることが目的である。研究対象者は、埼玉県内の短期大学で韓国語コースに所属している1年生の女子学生14名で、そのうち留学経験者が5名である。質問紙調査を実施し、学習者の動機づけや態度の変化を「留学経験あり」群と「留学経験なし」群に分けて検討した。その結果、全体的な傾向として、留学に対する態度が有意に低下することが示された。

キーワード：

日本人学習者・韓国語・動機づけ・留学・量的分析

1. 問題

1.1 はじめに

近年、学習の動機づけに関する研究の重要性が高まりつつある。外国語教育の研究課題の一つとして、教育的観点からだけでなく、心理的な観点からも学習者の動機づけに対する理解を深める試みが注目されている（Dörnyei & Ryan, 2015）。例えば、英語学習者にとって言語学習者の内的変化をもたらす要因の一つとなる海外留学は、その期間にかかわらず動機づけや態度にポジティブな効果をもたらすと報告されている（小林, 2017）。これまで日本人の英語学習者を対象とした海外留学の効果についての研究（例えば Irie & Ryan, 2015; Nakayama, 2013）は数多く実施されているが、最近では中国語や韓国語などの英語以外の言語を学ぶ学習者も増加してきているので、英語圏以外への留学の効果についての検証も進めていく必要が生じてくる。本研究では、日本で学習者が増加している言語の一つである韓国語に着目する。英語学習者と比較をしながら、日本人の韓国語学習に対する動機づけや態度の特徴について検討し、今後の外国語教育において英語以外の学習者への教育的示唆を与えることを目指す。

1.2 先行研究

動機づけとは、目標とする行動を起こす際にその行動に向かわせる心理的な過程である。動機づけ研究は心理学の中心的な分野であり、言語学習の動機づけ研究は 1960 年頃よりカナダの社会心理学の観点から、盛んに実施されるようになった（八島, 2019）。Gardner & Lambert (1972) によれば動機づけには、目標言語や文化に対する意識を高めることで学習意欲を呼び起こす統合的動機（integrative motivation）と、学業や就業における成功などの実益を目標とする道具的動機（instrumental motivation）がある。のちに、この統合的動機づけは再解釈され、L2 動機づけ自己システムという「理想自己」「義務自己」「学習状況への態度」の3要素から構成される理論が提唱された（Dörnyei, 2005）。理想自己は学習者が外国語を使い、なりたい自分を想像できることを示す。外国語を学習する際、義務自己は親や友人などの他人のために自分がどうあるべ

きかを表す。学習状況への態度は、学習の成功体験や教師の影響などの学習経験を含んでいる。この理論に基づくと、外国語教育の課題は学習者が外国語を使う自己像を鮮明に想像できるかであり、理想自己を持たせるためには、授業でコミュニケーション実践の場を作る必要性が求められる（八島，2019）。

一方で、内発的動機づけ（intrinsic motivation）と外発的動機づけ（extrinsic motivation）という概念を用いた動機づけ研究も発展してきた。内発的動機づけの概念を発展させた自己決定理論（self-determination theory）は、外国語教育の研究でも広く使用されている（Ryan & Deci, 2000a, 2000b）。言語学習における内発的動機の要因は、外国の文化や言語に対する関心や外国人とのコミュニケーションに対する意欲など、学習者の内面から生じる。外発的動機は、テストで高得点を取ると報酬が与えられるなどの外発的な要因から発生する。しかし、もともと内発的動機づけが強い学習者であっても、報酬などの外発的動機を与えられ、いったん目標を達成してしまうと学習意欲が低下する¹可能性もあるので、外発的動機を与える時期については注意する必要がある。

自己決定理論では、内発的動機づけを高めるには心的3欲求である「自律性」「有能性」「関係性」が満たされなければならない。自律性とは自分の意思で行動を決定し、その行動に責任を持つことである。有能性は自分にはやればできるという能力や資質があり、それを他者に示すことである。関係性では自分と社会とのつながりを意識し、よい関係を構築することが重要とされる。この3つの欲求が満たされると内発性が高まったり、外発的な動機を伴う活動であっても、自己に統合されたものになったりすることがあると考えられている（八島，2019）。

海外留学の場合、本人が希望して留学するのか、あるいは会社の命令で行くのかによって、同じ統合的動機であっても前者は理想自己、後者は義務自己に分類される（Taguchi, Magid & Papi, 2009）。Taguchi et al. (2009) は、中国政府の一人っ子政策により、中国の英語学習者は親の扶養に対する義務感を示す「義務自己」と、よい仕事に就きたいという「道具的動機（昇進）」の強い関連性を指摘している。このような動機づけの原因についての検証は、英語学習が中心となっており、中国語や韓国語などのアジア言語についての研究はあまり行われていない（例えば、鈴木，2019）。

¹このような現象はアンダーマイニング効果とよばれる。

外国語学習における動機づけ研究が進む中、留学の教育的効果との関連も注目されるようになり、アメリカやオーストラリアなどの英語圏への留学に関する研究が進んでいる（例えば、Irie & Ryan, 2015; 小林, 2017; 前田, 2017; Nakayama, 2013）。日本人による短期留学の効果を検証した研究では、英語学習に対する動機づけや態度が前向きになることや（小林, 2017; Nakayama, 2013）、学習者の異文化適応能力が伸びることが報告されている（前田, 2017）。一方で、海外留学がすべての学習者にポジティブな影響をもたらすとは限らないことも指摘されている（Irie & Ryan, 2015）。そこで近年、中国や韓国などのアジア地域にも日本人が留学している現状を踏まえると（日本学生支援機構, 2019）、英語以外の言語を学んでいる学習者の動機づけを明らかにしていくことが求められる。

2. 目的

本研究は、日本人の韓国語学習者の動機づけの特徴を留学経験の有無を含めながら検討し、英語学習者との相違を明らかにすることが目的である。

3. 方法

3.1 対象者

埼玉県内の短期大学で韓国語コースに所属している女子学生 27 名のうち、研究参加への同意を示さなかった 6 名を除き、1 回目（2019 年 7 月）と 2 回目（2020 年 1 月）の質問紙調査に回答した 14 名を分析対象とした²。対象者のうち 5 名は、2019 年 8 月下旬から 2020 年 2 月中旬までの 6 か月間、韓国留学プログラムに参加していた³。また、対象者が質問紙に回答する際、研究参加に同意しない場合でも一切の不利益は生じないことを口頭および書面で説明し、研究への参加を確認した。

²研究参加に同意した学生のうち、同意書を求めた時期と調査実施日が同一でなかったことから、全調査に参加しなかった学生は 4 名、2 回目に参加しなかった学生は 3 名であった。

³この 5 名については、2 回目質問紙調査を 2 月に実施した。

3.2 手続き

質問紙の回答実施時間は15分前後であった。先行研究（小林，2017）の対象者は、3週間の短期留学グループと4か月以上の留学グループであったが、本研究では短期留学の対象者がいなかったことから、韓国留学を経験した学生とそうでない学生に分けた。

3.3 質問紙

短期留学の動機づけと態度を検証した研究（小林，2017）で使用された項目を参考にし、以下のように修正を加えて本研究で使用した⁴。

まず、本研究の対象者は韓国語学習者だったので、先行研究（小林，2017）で使用された「英語」の部分を「韓国語」に置き換えた。項目の提示順序については先行研究で触れられていなかったため、回答結果が意図的に同一になるリスクを回避するために、本研究では類似した質問項目を続けて配置しないようにした。また、先行研究（小林，2017）で使用されていた「今後さらに大学やその他の所で韓国語の授業があれば、受講したい」という設問については「大学以外で韓国語の授業があれば、受講したい（項目43）⁵」と変更した⁶。統合的志向に関する設問（項目48，56，57）には、先行研究の中では「どの程度」がそれぞれ用いられていたが、本研究ではこの表現を削除した⁷。留学に対する態度に関する設問（項目51と59）については他の設問と語調をあわせるために、修正を加えた。

先行研究（小林，2017）と同様に、回答方法は6点尺度を採用し、項目1－47については「全くそう思わない（1）」から「非常にそう思う（6）」、項目48－59については「全くそうでない（1）」から「非常にそうである（6）」として回答を求めた。付録1に本尺度の59項目を示した。

⁴小林（2017）で使用された質問項目は Taguchi et al.（2009）を参考にしていた。

⁵項目に続く番号は、回答者が実際に回答した順番を意味する。

⁶大学での韓国語授業と大学以外での授業は本来、異なるものである。にもかかわらず、同一の質問項目で質問していたことから、本研究では後者のみを用いることにした。

⁷設問と選択肢が一致していないとみなし、本研究から外した。

4. 結果

4.1 学習者の動機づけや態度の16要因

韓国語学習者の動機づけや態度に関する59項目から構成される16の要因を変数として、IBM SPSS 23を用いて推測統計を実施した。有意水準は5%とした。本研究はサンプルサイズが大きいので、推測統計では有意差が認められない可能性も考えられた。そこで、第2種の誤り⁸を避けるため(伊藤, 1998; 水本・竹内, 2008, 2011, 2014),あるいは実質的な差の報告も推奨されているため(American Psychological Association, 2019),本研究では記述統計である効果量を測定し、検定力分析を実施した。検定力分析にはフリーソフトのG*Power3.1⁹を使用した(Faul, Erdfelder, Lang, & Buchner, 2007; 水本・竹内, 2011)。

4.2 アルファ係数による項目の内的一貫性

質問紙調査で用いられた設問を要因ごとに分類するにあたり、項目間の内的整合性を測定した。事前・事後テストで使用された尺度をクロンバックの α 係数を使って検証した結果を表1に示す。事前テストで「義務的自己」が0.2以下と極端に低い値を示していた。しかし、全体的に高い数値が算出されているので、先行研究(小林, 2017)で用いられた16の要因をそのまま変数として用い分析を進めた。

4.3 留学経験の有無による16要因の比較

学習者を留学経験あり群となし群に分け、それぞれの動機づけと態度の変化を検討した。平均値と標準偏差を表2に示す。「家族の影響」と「同化への恐れ」を除くと、事前・事後テストでは2群における平均値が全体的に高い傾向が示された。なかでも「目標言語のコミュニティに対する態度」は、留学経験あり群(事前 $M = 5.40$, $SD = 0.65$; 事後 $M = 5.30$, $SD = 0.54$)となし群(事前 $M = 5.19$, $SD = 0.89$; 事後 $M = 5.06$, $SD = 0.85$)の両群で、事前・事後テストの値には大きな差がなく、全ての平均値が5を上回っていることから、韓国語のコ

⁸実際には有意差があるのに有意差が認められないこと。

⁹次のHPよりダウンロード。

<http://www.psychologie.hhu.de/arbeitsgruppen/allgemeine-psychologie-und-arbeitspsychologie/gpower.html>

コミュニティに対する態度は非常に高いながらも安定していることが示された。

表 1 16 要因と信頼性係数 (N = 14)

	変数	事前テスト	事後テスト
1	動機づけ	0.77	0.62
2	理想自己	0.84	0.82
3	義務的自己	0.19	0.82
4	家族の影響	0.86	0.82
5	道具的-接近	0.89	0.80
6	道具的-回避	0.76	0.51
7	言語学習に対する自信	0.82	0.89
8	韓国語学習に対する態度	0.95	0.92
9	海外旅行への志向性	0.58	0.82
10	同化への恐れ	0.74	0.86
11	韓国語に対する興味	0.87	0.84
12	韓国語使用への不安	0.84	0.66
13	統合的志向	0.79	0.70
14	文化に対する興味	0.79	0.86
15	目標言語のコミュニティに対する態度	0.78	0.80
16	留学に対する態度	0.94	0.72

本研究はサンプル数を考慮した場合、データの正規性が満たされないため、本来であればノンパラメトリック検定を使うべきである。しかし、16 要因についてそれぞれ被験者間（留学経験のあり群・なし群）、被験者内（事前・事後テスト）の 2 要因 2 水準での検討となるために、ノンパラメトリック検定を実施した場合、第 1 種の誤り¹⁰の危険性が高まる。そこで、本研究では検定の繰り返しを回避し、結果の解釈しやすさを考慮した上で、分散分析（ANOVA）を使った。その結果、被験者内要因の検討ではいずれの変数においても有意な

¹⁰本当は有意差がないのにもかかわらず、有意差があるという間違った判断をすること。

変化は見られなかった。また、被験者間要因の検討の結果、いずれの16変数においても有意な差異は検出されなかった。この結果から、2群の間には動機づけや態度での統計的な差はなく、いずれの群においても動機づけや態度に関する有意な変化は見られなかった¹¹。

表2 韓国語学習に対する動機づけと態度

要因	留学経験あり群 (n=5)				留学経験なし群 (n=9)			
	事前テスト		事後テスト		事前テスト		事後テスト	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1 動機づけ	4.20	0.82	4.50	0.50	3.94	1.24	4.06	1.47
2 理想自己	4.12	0.67	4.28	0.93	3.64	1.15	3.18	0.90
3 義務的自己	3.80	0.61	3.20	1.45	3.33	0.91	2.89	1.19
4 家族の影響	3.15	1.24	2.90	0.80	2.44	1.12	2.83	1.18
5 道具的-接近	4.76	1.35	4.65	0.72	4.42	0.97	3.83	0.83
6 道具的-回避	4.40	1.38	4.45	0.96	4.00	0.87	3.72	0.49
7 言語学習に対する自信	4.80	0.77	5.07	0.92	4.85	0.82	4.63	1.21
8 韓国語学習に対する態度	5.20	1.02	4.85	0.65	4.25	1.02	4.31	0.93
9 海外旅行への志向性	3.93	0.83	4.67	0.97	4.44	0.85	4.22	1.24
10 同化への恐れ	2.44	0.80	2.08	0.94	1.91	0.66	2.31	0.80
11 韓国語に対する興味	5.13	1.07	5.00	0.41	4.48	1.30	4.48	1.20
12 韓国語使用への不安	4.60	0.95	4.10	1.13	4.25	0.93	4.36	0.65
13 統合的志向	5.13	0.51	5.20	0.77	4.81	1.30	4.59	1.09
14 文化に対する興味	4.87	0.77	5.07	0.92	4.81	1.21	4.74	1.04
15 目標言語のコミュニティーに対する態度	5.40	0.65	5.30	0.54	5.19	0.89	5.06	0.85
16 留学に対する態度	5.50	0.71	5.10	0.82	5.00	1.32	4.22	1.56

次に事前・事後テストの平均値の差を検討するため、1サンプルの t 検定を実施した。その結果、「留学に対する態度」では有意な差異が認められた($t(13) = 3.12, p = .008$)。それ以外の要因では有意な差異は認められなかった(付録2を参照)。効果量の測定では、「留学に対する態度」における効果量がCohen(1988)

¹¹ノンパラメトリック検定の結果、被験者間の検討では分散分析と同様の傾向が見られたが、被験者内の検討では「留学に対する態度」($z = 2.54, p = .011$)において有意な差異が認められた点で異なっていた。

の示す大きな効果量 (large) の絶対値 0.8 を上回る $d = 0.83$ を示した¹²。検定力も 0.90 と十分に大きかった。この結果から、学習者の留学に対する態度は低下していると示された。

5. 考察

5.1 先行研究との比較

本研究では、日本人の韓国語学習者の動機づけや態度の変容の特徴を、英語学習者との比較を試みながら考察することが目的であった。また、韓国留学経験の有無による学習者の動機づけの変容を明らかにすることを試みた。

まず、質問紙で使用した 59 項目を 16 要因に分類するために算出した信頼性係数のうち、先行研究 (小林, 2017) の義務的自己では 3 週間留学グループは 0.81, 4 か月以上留学グループは 0.70 であったのに対し、本研究では 0.19 という極端に低い値であった。その理由として、本研究の対象者がこの要因を構成する 3 つの項目 (項目 24, 27, 47) を回答する際、項目の解釈が対象者ごとに異なっていたのではないかと考えられる。項目 24 と 27 では、「親」が韓国語学習をどのように考えているかについての設問である一方、項目 47 では「周りの人々」という異なる表現が用いられたので、対象者によって「周りの人」に誰を含めるかの解釈が違っていたのではないかと推測される。

本研究の記述統計の結果では、「目標言語のコミュニティに対する態度」が事前・事後テストの両方において 1-6 点の尺度で全て 5 点台の平均値を示していることから、統合的動機 (Gardner & Lambert, 1972) が強く影響していると想定される。この結果は、英語学習者の場合と一致していた (小林, 2017)。入学前から、韓国語学習者の多くは韓国や韓国語に関心があり、入学以降も周囲に自分と似たような趣味を持つ学習者とともに過ごしてきたために、韓国語や韓国への興味を維持できたと考えられる。

¹²ANOVA を使って効果量 (偏イータ 2 乗) は算出できるが、その数値は変数間の関係の強さを示す (水本・竹内, 2008)。偏イータ 2 乗では効果量は .14 以上で大きいとみなされ、この指標を用いた場合、事前・事後テストの検討では理想自己 (.143)、海外旅行での志向性 (.187)、同化への恐れ (.257)、および 2 群の検討では理想自己 (.178)、韓国語学習に対する態度 (.177) で有意差が認められた。しかし本研究の目的は、事前・事後テストにおける平均値の差の検討であったことから、Cohen's d の方が適切だとみなし分析に用いた。

一方、L2 動機づけ自己システム (Dörnyei, 2005) の観点から見ると、「理想自己」では留学経験あり群 (事前テスト: $M = 4.12$, $SD = 0.67$; 事後テスト: $M = 4.28$, $SD = 0.93$) と留学経験なし群 (事前テスト: $M = 3.64$, $SD = 1.15$; 事後テスト: $M = 3.18$, $SD = 0.90$) では、前者のほうは 0.16 高くなっているのに対し、後者は 0.46 低下している。この結果から、留学経験のない学生にとって授業が難しくなったり、ついていけなくなったりしたことが原因で、韓国語を使った将来の自分を想像できなくなってきたのではないかと推測される。

「義務的自己」では、留学経験あり群 (事前テスト: $M = 3.80$, $SD = 0.61$; 事後テスト: $M = 3.20$, $SD = 1.45$) となし群 (事前テスト: $M = 3.33$, $SD = 0.91$; 事後テスト: $M = 2.89$, $SD = 1.19$) の両群で、平均値が全体的に低いことが示された。これは、義務感や責任感というより、自分の意思で韓国語を学んでいる学習者が少なくないことが言える。一方で、韓国語学習者の理想自己や義務自己は比較的低い傾向にあることから、学習者の韓国人や韓国旅行への関心が薄れてくると、韓国語学習に対する動機づけも同時に低くなるという懸念も生じることになるだろう。

本研究の推測統計の結果から、留学経験の有無による 2 群の差異は見られなかったが、学習者の留学に対する意欲は留学経験の有無にかかわらず、ネガティブに変化していることが示された。これはポジティブな変化が見られた英語学習者の場合とは異なっていた (小林, 2017)。その理由として、研究対象者の違いが挙げられる。小林 (2017) は大学生を対象としていたのに対し、本研究の対象者は短大 1 年生であった。事後テストを実施した時期が 1 年次を終え、その後本格的に就職活動をしなければならない状況を踏まえると、就業に対する関心が高まる一方、留学に対する興味が薄れてきた結果と考えられる。

留学に対するネガティブな態度として、地理的および経済的な要因も関係していると思われる。韓国の場合、日本から 3 時間以内で行くことができ、物価も日本と比較しても極端に高いわけではない。それゆえに、必ずしも在学中に留学したいと思わなくなり、むしろ旅行などで気軽に訪問して、買い物や食事を楽しみたいと考える学習者が増加しているように見受けられる。

これまで、日本との歴史的・政治的な立ち位置の違いによって、日韓関係の悪化がしばしば表面化されてきた。本研究の調査実施の際、このような日韓関係が学習者の留学に対する態度に影響したかについては、今回収集したデータ

の分析から明らかにすることはできなかった。しかし、短大における韓国語の学習者の多くが韓国の文化面への関心が高いことを考慮すると、二国間関係が学習者に及ぼした影響は比較的弱いと考えられる。今後の研究の課題として、韓国の大衆文化だけでなく歴史・政治問題が学習者に及ぼす影響の検討にも着目すべきだろう。

5.2 本研究の理論的意義

本研究の理論的意義として、短期大学と大学は同じ高等教育機関であるが、学生の学業に対する動機づけが両者で大きく異なっている点に着目すべきである。四年制大学の学生とは異なり、短大生の場合、入学前にすでに希望する職種などが決まっている場合が多いので、入学後は資格取得のために必要とされる科目を履修しなければならない(渋谷・岩田・前澤・石川・杉原, 2017)。また、短期大学の学生数は1994年をピークとして2019年には過去最少となっていることから(文部科学省, 2019)、学生の性質も以前と比較すると異なってきたと言えるかもしれない。四年制大学と短期大学では同じ1年生だとしても、短大の場合、学業が2年と短いゆえに職業選択の場面における時間的な猶予はあまり残されていない(松田・加藤・永盛, 2012)。今後は、外国語学習における短大生の動機づけについて、大学生とは別の枠組みを用いて検証していく必要がある。

5.3 本研究の教育実践的意義

教育的および実践的意義から見た本研究は、英語以外の言語を学習している学習者の動機づけの特徴を捉えることにある。英語学習者による留学経験の効果を検討した研究(小林, 2017)の結果とは異なり、留学経験のある学習者の動機づけに対するポジティブな変化は見られなかった。これまでの先行研究が大学生の英語学習者を対象として動機づけの検証を実施しているのに対し、本研究は短大の韓国語学習者という全く異なる設定であった。同じ年代の日本人の外国語学習者であっても、海外留学に対する意欲に差が見られることがわかった。今後、この点については量的だけでなく質的な分析を加えることで、より詳細な学習者の心的な変化を検証することが可能となるだろう。

5.4 まとめと今後の課題

本研究では、英語学習者との相違を検討するために、対象者を6か月留学者とそれ以外の群に分けて検討した。その結果、韓国への留学経験の有無によって学習者の動機づけに大きな違いは見られず、全体的に留学に対する意欲は低下する傾向が明らかになった。英語学習者では、統合的動機と理想自己との関連性が指摘されているが (Dörnyei, 2005), 韓国語学習者の場合、韓国人や韓国旅行に興味を持っていたとしても、それによって学習者が韓国語を使っていたり自分を想像することにはならないと示唆された。また、英語学習者は留学に対する態度が前向きに変化していたのに対し、韓国語学習者の場合は、留学への関心が薄くなる傾向が示された。

韓国語学習者の中には6か月留学には参加しなかったが、夏季休暇や週末などを利用して短期間ではあるが、韓国訪問を繰り返している学習者も存在する。特に、このような学習者が持つ韓国語学習に対する考え方や価値観について検討を進めていくことは、今後の韓国語教育の発展のためにも重要である。また今後の研究では、データサンプルを大きくすることに加えて、韓国訪問の頻度や滞在期間ごとに韓国語学習者の特徴をより詳しく示したいと考える。

本研究では英語学習者向けの質問紙項目を修正して用いたため韓国語学習者の特徴を詳細に捉えることができなかった。しかしながら、外国語教育における動機づけ研究という観点から、英語学習者と韓国語学習者を取り巻く社会的環境や教育的環境の相違を明らかにすることができたのではないかと考える。今後は韓国の社会や文化の特徴を考慮した質問項目を作成すれば、韓国語学習者の特徴を具体的に説明できるだろう。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 00842 の助成を受けたものである。また、第一著者が清泉女子大学言語教育研究所客員所員として活動した研究成果である。

本論文の執筆にあたり、阿部恵子さんと木下恵美さんには下読みをしていた。この場を借りてお礼申し上げる。

参考文献

- American Psychological Association. (2019). *Publication manual of the American Psychological Association (7th ed.)*. <https://doi.org/10.1037/0000165-000>
- Cohen, J. (1988). *Statistical power and analysis for the behavioral sciences (2nd ed.)*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Dörnyei, Z. & Ryan, S. (2015). *The psychology of the language learner revisited*. Routledge.
- Faul, F., Erdfelder, E., Lang, A.-G., & Buchner, A. (2007). G*Power 3: A flexible statistical power analysis program for the social, behavioral, and biomedical sciences. *Behavior Research Methods*, 39, 175-191.
- Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley.
- Irie, K. & Ryan, S. (2015). Study abroad and the dynamics of change in learner L2 self-concept. In Z. Dörnyei, P. D. MacIntyre, & A. Henry (Eds.), *Motivational dynamics in language learning* (pp. 343-366). Multilingual Matters.
- 伊藤武彦 (1998) 「実践的・探索的研究の効果測定における『効果偏差値』の提案」『和光大学人間関係学部』3, 15-23.
- 小林千穂 (2017) 「短期留学の外国語学習モチベーションへの効果」『天理大学学報』68(2), 1-19.
- 前田ひとみ (2017) 「個人別態度構造分析による日本人学生の海外留学における学び」『目白大学高等教育研究』23, 1-10.
- 松田浩平・加藤大鶴・永盛善博 (2012) 「短期大学生に於ける進学動機と職業志向性に関する一研究」『東北文教大学・東北文教大学短期学部紀要』2, 149-159.
- 水本篤・竹内理 (2008) 「研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点」『英語教育研究』31, 57-66.
- 水本篤・竹内理 (2011) 「効果量と検定力分析入門—統計的検定を正しく使うために」『より良い外国語教育のための方法—外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会 2010 年度報告論集—』48-74.
- 水本篤・竹内理 (2014) 『外国語教育研究ハンドブック【改定版】研究手法の

より良い理解のために』松柏社

文部科学省 (2019) 「令和元年度学校基本調査 (確定値) の公表について」
https://www.mext.go.jp/content/20191220-mxt_chousa01-000003400_1.pdf (閲覧日 2020年3月26日)

Nakayama, A. (2013). Motivational changes through study abroad experience in the U.K. 『JACET 中部支部紀要』 11, 63-76.

日本学生支援機構 (2019) 「平成29年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2018/_icsFiles/afieldfile/2019/01/16/datah30n_1.pdf (閲覧日 2020年2月28日)

Ryan R. M. & Deci, E. L. (2000a). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55(1), 68-78.

Ryan R. M. & Deci, E. L. (2000b). Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology*, 25, 54-67.

渋谷郁子・岩田昌子・前澤いすず・石川拓次・杉原亨 (2017) 「入学までに形成された学習観が専門職養成系短期大学への適応に与える影響」『リメディアル教育』 12, 19-25.

鈴木ひろみ (2019) 「中国語学習の動機づけ変化及び学習継続促進要因」『中央大学論集』 40, 33-42.

Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2009). The L2 Motivational Self System among Japanese, Chinese, and Iranian Learners of English: A Comparative Study. In Z. Dörnyei and E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self*. Multilingual Matter.

八島智子 (2019) 『外国語学習とコミュニケーションの心理』 関西大学出版部

付録 1

16 の要因 (因子) と 59 項目 (小林, 2017 を修正)

1 動機づけ

- 22 韓国語の勉強に努力を惜しまない。
- 25 韓国語を一生懸命勉強している。
- 36 自分は韓国語の勉強を頑張っていると思う。
- 43 大学以外で韓国語の授業があれば、受講したい。

2 理想自己

- 6 外国に住み、韓国語で討論している自分を想像できる。
- 29 韓国語を話せるようになって自分を想像する。
- 35 自分が外国人と韓国語で話をしている状況を想像できる。
- 37 将来の仕事について考えるときはいつも韓国語を使っている自分を想像する。
- 38 将来自分がしたいことをするためには、韓国語が必要となる。

3 義務的自己

- 24 韓国語の勉強をして教養のある人間にならなければならないと、親は強く思っている。
- 27 韓国語を勉強しないと親が残念に思うので、韓国語を勉強しなければならない。
- 47 私が韓国語を勉強することを周りの人々が期待しているので、韓国語の勉強は必要だ。

4 家族の影響

- 34 時間があるときは韓国語の勉強をするように、と親はすすめている。
- 40 親が韓国語の勉強をすすめている。
- 41 親は私に、あらゆる機会を利用して韓国語を読んだり話したりするなど、韓国語を使うようにすすめている。
- 42 親は私に、授業の後さらに語学学校などで韓国語を勉強するようにすすめている。

5 道具的—接近

- 11 韓国語ができれば国際的に働くことができるので、韓国語の勉強は大切だ。
- 23 韓国語の勉強をしておくといつか良い仕事を得るために役立つと思うので、韓国語の勉強は大切だ。
- 33 今後さらに自分の専門について勉強していくためには韓国語が必要になると思うので、韓国語の勉強は大切だ。

39 将来昇進のために韓国語力は必要となるので韓国語の勉強は大切だ。

46 勉強や仕事等で海外に長期滞在したいと思っているので、韓国語を勉強しておくのは大切だ。

6 道具的回避

8 韓国語ができないと、出来の悪い学生と思われるので韓国語の勉強は大切だ。

16 韓国語の資格試験で低い点数を取ったり不合格になりたくないで韓国語の勉強は必要だ。

20 韓国語の単位をとらないと卒業できないので、韓国語の勉強をしなければならない。

44 大学の韓国語で悪い成績を取りたくないで、韓国語の勉強をしなければならない。

7 言語学習に対する自信

1 このまま勉強を続けたら、将来楽に韓国語を書けると思う。

2 このまま勉強を続ければたいいていの韓国語の文章を読み、理解できるようになると思う。

3 もっと努力すれば、韓国語を確実に身につけられると思う。

8 韓国語学習に対する態度

18 韓国語の授業の雰囲気が好きだ。

19 韓国語の授業をいつも楽しみにしている。

26 韓国語を学ぶのは本当に楽しい。

28 韓国語を勉強するのはとても面白い。

9 海外旅行への志向性

5 海外旅行をしたいので、韓国語の勉強は大切である。

9 韓国語ができなければ、旅行があまりできなくなるので、韓国語の勉強は大切だ。

10 韓国語ができれば海外旅行が楽しめるので韓国語の勉強をする。

10 同化への恐れ

15 韓国語の影響で日本語が乱れていると思う。

21 韓国語の文化的、芸術的価値は日本の価値観をだめに思う。

30 韓国語圏の国々の影響で、日本人のモラルが低下していると思う。

31 国際化が進むと日本の独自性が失われる危険性があると思う。

32 国際化によって、日本人が日本文化の重要性を忘れる危険性があると思う。

11 韓国語に対する興味

- 4 会話の中での韓国語の使い方に興味がある。
- 12 韓国語が話されているのを聞くとワクワクする。
- 45 日本語と韓国語の単語の違いは面白いと思う。

12 韓国語使用への不安

- 7 外国人に韓国語で道を聞かれると緊張する。
- 13 韓国語でネイティブスピーカーと話をする場合、不安を感じる。
- 14 韓国語のネイティブスピーカーと会うと、不安になる。
- 17 韓国語の授業で発言している時、不安になったり戸惑ったりする。

13 統合的志向

- 48 韓国語が好きですか。
- 56 韓国語圏の人々のようにになりたいですか。
- 57 韓国語圏の人々の文化や芸術をさらに知るためには、韓国語学習は大切だと思いますか。

14 文化に対する興味

- 49 韓国語圏で作られたテレビ番組は好きですか。
- 52 韓国語圏の映画は好きですか。
- 53 韓国語圏の雑誌や、新聞、あるいは本は好きですか。

15 目標言語のコミュニティーに対する態度

- 50 韓国語圏に住んでいる人々が好きですか。
- 54 韓国語圏の人々と知り合いになりたいですか。
- 55 韓国語圏の人々についてもっと知りたいですか。
- 58 韓国語圏へ旅行するのは好きですか。

16 留学に対する態度

- 51 今後、機会があれば韓国語圏の大学に留学したいですか。
- 59 今後、海外研修の機会があれば参加したいですか。

付録2

事前・事後テストの平均値の差異の検討 (N = 14)

	要因	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>p</i>
1	動機づけ	0.00	0.95	1.000
2	理想自己	-0.24	0.82	.290
3	義務的自己	-0.50	1.17	.135
4	家族の影響	0.16	1.28	.646
5	道具的—接近	-0.42	0.85	.089
6	道具的—回避	-0.16	0.97	.546
7	言語学習に対する自信	-0.05	0.73	.810
8	韓国語学習に対する態度	-0.09	0.85	.700
9	海外旅行への志向性	0.12	1.10	.692
10	同化への恐れ	0.13	0.75	.521
11	韓国語に対する興味	-0.05	0.78	.824
12	韓国語使用への不安	-0.11	0.91	.668
13	統合的志向	-0.12	0.56	.444
14	文化に対する興味	0.02	0.73	.905
15	目標言語のコミュニティーに対する態度	-0.13	0.57	.426
16	留学に対する態度	-0.64	0.77	.008